

ほくげんこんエネルギー・コラム



欧州は「ナウい」、日本は「おっくれてるう」?

～エネルギー事情に応じた「世界に一つだけのエネルギー転換」を～

「ナウい」に「おっくれてるう」

昭和の終わり頃、「ナウい」(今風でカッコいい)という言葉が流行った。バブルの頃までは、流行が正義である。ディスコ(今でいうクラブ)に行ったら、みんな同じ「振り」で踊ったものだ。「振り」を知らない「おっくれてるう」なのである。

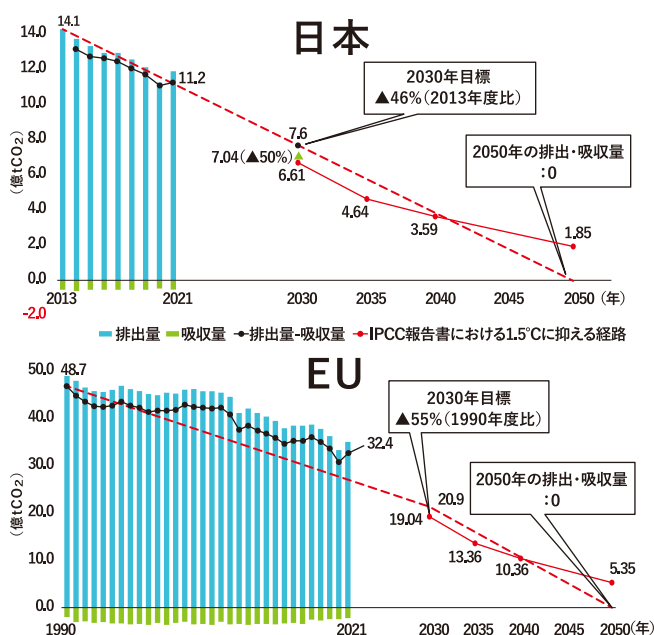
その後、こうした言葉は次第に死語となっていく。流行よりも自分らしさが大切にされるようになったのであろう。「世界に一つだけの花」である。

私たちは「おっくれてるう」?

ところが、気候変動問題が脚光を浴びるにつれ、世の中は再び流行に敏感になる。たとえば、「欧州では2040年に温室効果ガスを90%も減らそうとしている」、「欧州では石炭火力の廃止計画が進む」等々。昔風に言う「ナウい」のは欧州で、日本は「おっくれてるう」なのだ。

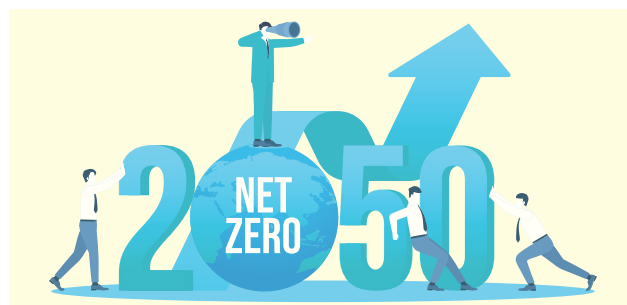
さて、図1は、2050年ネット・ゼロ*に向けた日本とEUにおける温室効果ガス削減の進捗状況である。日本は概ねネット・ゼロへのトレンド(赤点線)上で進捗しているのに対し、EUは実績がかなり上振れしている。私たちは決して「おっくれてるう」とは言えないのである。

*温室効果ガスの排出量と吸収量のバランスをとり、正味の排出量をゼロにすること。ネット(Net)は英語で「正味の、最終的な」の意味。



目標と実現は別物

各国の気候変動目標は、その実現を約束するものではない。理想に向けて努力しようという考え方(いわゆるバックキャスト)なのだ。そして、政治家は票を求めて、高い理想を競ってきた。例えば、2021年に誕生したドイツのシュルツ政権は、前政権が2019年に掲げたばかりの「2038年の脱石炭火力」を一気に8年も前倒しすると公表した。電力の実務を知る筆者は、「供給は大丈夫か?」と耳を疑ったが、連立協定をよくよく読むと、「理想的には」という前置きがあった。これが政治である。



「世界に一つだけのエネルギー転換」を

G7各国で目標に沿って温室効果ガスを減らしているのは英国と日本だけである。

英国は風力の適地に恵まれるとともに、周辺国との電力融通を通じて、不安定な風力発電による電気の過不足も補完できる。さらに石炭を代替できる国産のガスもある。

こうした環境に恵まれない日本では、原子力も再エネも、脱炭素電源は可能な限り総動員しつつ、不安定な再エネの調整役としては、石炭を含めた火力発電も今しばらくは上手に使っていく他はない。

異なるエネルギー事情を抱える国は、同じ「振り」では踊れない。ネット・ゼロに向けては、「世界に一つだけのエネルギー転換」が求められるのである。



ヒロ・ミズカミ 代表
水上 裕康 氏

電力取引・発電用燃料取引のコンサルタント。
クライアントの外資系投資銀行とともに、市場リスク管理を中心とした電力・燃料取引を電力会社に紹介。そのかわり、電力を中心としたエネルギー関係情報の発信を続けている。
エネルギーフォーラム誌等に寄稿。
一橋大学商学部卒、米国ジョージタウン大学MBA(経営学修士)
電力会社で通算16年間燃料業務を担当
2020年(株)ヒロ・ミズカミ設立